

琉球と朝鮮半島の文化交流

Cultural Exchange between the Ryukyu Kingdom and the Korean Peninsula

比嘉政夫

【論文要旨】

これまで、琉球の文化を周辺地域の文化との交流史の検証や比較研究をする場合、隣接する異なった民族・地域文化との接觸・交流については、日本本土との交流については当然のこととして、その主眼は中国大陸に向かれて、朝鮮半島の文化については看過されてきた。琉球と朝鮮半島の交流は1389年に琉球国王が倭寇に捕らえられた「倭寇被掠朝鮮民」を送り返すとき硫黄などを献じて通好を求めたことに始まる。その後、琉球から朝鮮半島への亡命や、薩摩を経て来琉した朝鮮の陶工の存在、浦添城址から出土した高麗瓦などが示すように、歴史的にさまざまな交流があったことが今日では明らかになっている。しかしながらその一方で、双方の民俗文化についての交流やその比較研究は必ずしも十分になされてこなかった。けれども、近年になって韓国の研究者との交流も盛んになり、大学院生や若手研究者などの若い学徒たちが韓国の民俗文化に寄せる関心も高まりつつあり、琉球と朝鮮半島の文化の比較研究の具体的な成果も現れてくるようになった。そこで本稿においては、筆者の調査に基づき、沖縄の門中における家譜と朝鮮半島の門中における族譜の比較を通じて、文化交流史研究の新しい可能性を提示する。門中とは父系血縁で結びつく集団である。琉球には門中の系図を記載したもとして家譜があり、朝鮮半島には同じように族譜がある。これらを比較したところ、さまざまな類似点と相違点を見出すことができた。この類似点が、琉球と朝鮮半島の文化交流によって生まれたものなのか、それとも中国文化の影響を同時に受けながら、それぞれ土着的なものを反映しつつ独自のものを生み出したのかを見極めることが、今後の琉球と朝鮮半島の文化交流研究の大きな始まりになると考えられる。